



← 11 黒滝神社

- 14 西山興隆寺
- 15 本堂
- 16 宝篋印塔
- 17 銅鐘

大庄屋芥川家
墓所と馬塚
18

古田のシダレザクラ
19

常石山城跡
21

金仙寺
20

古田扇状地
13

12 お廉踊り

文
田滝小学校

関屋川扇状地
13

35 釜之口堰
(丹原西中学校区参照)



1 丹原七夕まつり

8月5日～7日の3日間、各商店や地域の団体の手で、約1kmの丹原商店街は、趣向を凝らした七夕飾りで埋まる。その下で、地域内外の伝統芸能や盆踊り、鼓笛パレード、笹飾りコンテストなどが繰り広げられ、約3万人の人が訪れる丹原の夏の風物詩である。

2 産業まつり

毎年12月の第1日曜日に行われている丹原町産業まつりは、特産品の柿やミカンなど農産品の直販や地元商店連盟によるバーゲンセール、餅の実演販売、バザーなど多彩な催し物で、約3,000人の参加がある。

3 佐伯記念館

明治36年、丹原町西長野に生まれた佐伯勇氏は、昭和2年大阪電気軌道（現在の近畿日本鉄道）に入社し、昭和27年社長に就任、路線延長や新型車両の導入、百貨店や旅行代理店経営なども手がけ、私鉄最大手“近鉄グループ”を築き上げた。近鉄バッファローズオーナーとしての功績で、野球殿堂入りも果たす。氏の遺品などが展示された「佐伯記念館」が丹原町池田にある。記念館に入って右側にある佐伯氏の力強い胸像は、日本芸術院会員・富永直樹氏の作品で、側面には佐伯氏の略歴を記した碑文が刻まれている。

昭和56年に氏からの2億5千万円の寄付で設立された「(財)佐伯記念育英会」は、今も25名の学生に対して給付が続けられている。

4 丹原ふるさと歴史館

旧丹原町が元の西条法務局丹原出張所を譲り受け、平成13年に開館した。願連寺泉遺跡、星野遺跡、兼久庵寺遺跡、お筆山古墳、耳金城跡遺跡などからの出土遺物や黒河健一氏の遺物コレクション、町内の文化財写真などが展示され、毎週土・日に開館している。

玄関入口には、丹原町出身の岩石研究家・玉井肅一先生の岩石標本（火成岩153種、変成岩75種、堆積岩13種）が、また、館の北側には丹原町内収集の民俗資料も分類・整理され、展示されている。

5 周ちゃん広場

平成18年3月、JA周桑の直販所としてオープン。安くて新鮮な野菜や果物（店頭で並ぶのは1日限り!）、米、肉、魚、花などに加えて、JA周桑の醸造工場で作られる味噌、醤油や手作りお菓子などが並び、土日はもちろん平日も市内外から多くの買い物客が訪れ、新西条市の新たな賑わいスポットになっている。何より、全ての商品に生産者のラベルを貼っており、消費者に生産者の顔が見える、“地産地消”の取組みはととても安心できる。



丹原七夕まつり



佐伯記念館



丹原ふるさと歴史館



四角宝塔

6 四角宝塔

池田の(株)宮田鉄工所内にある、高さ約2m、凝灰岩製と思われる宝塔。地区には河野一族の墓または供養塔との言い伝えが残るが、定かではない。江戸時代初期の建立と推定されている。

「丹原町誌」(大正4年編)に、『北池の中に小島あり松樹老いて五輪塔苔むせり…』と、この宝塔の記述がある。元は、北池と呼ばれた池の中の小島にこの塔は建っていた。続いて「丹原町誌」は、その由来を、「河野一族の町田という素封家の墓」、あるいは、「南北朝時代の勤皇派得能家の宝剣を納めた塔」という二説を紹介している。北池は昭和47年に埋め立てられ、工場の敷地になったが、小島はそのまま保存された。



久妙寺のサクラ

7 丹原の在町(ざいまち)

丹原の町は、正保元年(1644年)初代松山藩主松平定行が農商分離政策として、計画的につくった町(在町)である。当時は未墾の原野で、50cm下は中山川原と同じ砂礫群で、作物のできない原野を開墾して町とした。

まず、町の中心(現在の郵便局西の十字路)を起点に、東西各2丁(実測264m)、南北は道路の側溝から各々30間(実測63m)、各戸の間口を平均4~5間とする敷地を完成させ、各地から商人や大工、左官、手工業者等52軒を移住させ、特典として宅地税を免除した。

町の裏通りに松並木を植樹したことから、「松の町」とも呼ばれる。丹原小学校の校章は松がモチーフとなっている。

昔の地割や共同井戸、恵美須神社等が今も残っており、昔を偲ぶことができる。

8 久妙寺とサクラ

梵音山弘法院東光坊久妙寺は、古義真言宗御室派で総本山仁和寺の末坊。

三つの池に囲まれた境内には、各種の古木約300本のサクラが咲き競う。様々な種類があるため、花の期間は約1月と長く、サクラの名所として、市内外からの花見客で賑わう。

大師堂や閻魔堂、大日堂などの建造物にも見るべきものがある。山のふもとにある境内から見下ろす道前平野、瀬戸内海の眺望も素晴らしい。

9 耳金城跡(丹原総合公園)

丹原町久妙寺にある丹原総合公園は、多くの遊具が置かれ、豊かな自然環境に恵まれた、親子連れなどには人気の公園だが、耳金城と呼ばれる河野氏の中世城館跡であることはあまり知られていない。

一説には、「興国4年(1343年)、天授5年(1379年)の細川氏の来襲で落城した」とも、また一説には、「天正13年(1585年)の秀吉の四国侵攻で落城、城主の田中通澄は帰農した」とも伝えられるが、定かではない。

調査によれば、耳金城第3郭と比定される場所は、東西約30m南北約20mを平坦地とした上で、中央に稻荷社を祀り築城したものとみられ、柱穴87、貯蔵穴、堀切などが検出された。

また、弥生時代後期・中期の土坑墓15基(壺棺墓あり)や廃棄された遺物の破片も多量に見つかっており、耳金城第3郭は弥生時代の墳墓を削平し、その上に築かれたものと考えられる。



耳金城跡(丹原総合公園)

10 おしぶの森（生木地蔵）

四尾山といい、道前平野の真ん中にある標高60mの小高い丘。山頂には福岡八幡神社が祀られ、正月の初詣客で賑わう。社へ登る137段の長い石段の両側は多種多様な樹木に覆われているが、かつては亜熱帯植物の北限地として、国の天然記念物に指定されていた。

麓の四国霊場番外11番札所生木山正善寺の本尊生木地蔵には、『弘法大師が楠の大木の麓で休んでいたとき、仏様の「お地蔵様を彫って、人々を助けるように」というお告げを聞き、お経を唱えながら一心に彫り、右耳を入れれば出来上がりという時に、一番鶏が啼いた（天邪鬼の仕業）ため、彫るのをやめて旅立った』という伝説がある。「耳欠け地蔵」とも言われ、耳の病に霊験があるとされ、信仰を集めている。

また、麓の宮司宅の庭には、文政5年（1882年）建立で、周桑地区では最古とされる芭蕉の句碑がある。「花の陰 うたひに似たる 旅ね哉 芭蕉」

11 黒滝神社社叢（しゃそう）

高縄山地西部の黒滝山中腹に黒滝神社が祀られている。本殿は標高756mの山上にあり、その登り道は厳しいが、一帯の山地は深山幽谷の趣がある。

麓近くには、ヤブツバキ、アラカシ、ツクバネガシなどの常緑樹が多く、登るにつれ、落葉樹・広葉樹がその数を増やし、多数の巨木・古木が繁茂する。中でも本殿脇のヒノキや尾根上のアカマツ、ツクバネガシは見事である。社叢内には大木と呼ぶもの47科155種あり、社叢全体が市指定の天然記念物である。

12 お簾踊り

丹原町田滝地区に400年以上も伝わる、黒滝神社に奉納される雨乞いの踊りで、8月15日に行われる。

そろいの浴衣で、太鼓音頭、囃子に合わせて、蝶の羽ばたきのように、手に持った2本のそろいの扇子をひらめかせて踊る。踊りと踊りの間に述べる、踊り場のほめ言葉、早口上もあり、昭和40年には県の無形文化財、昭和52年には県の無形民俗文化財の指定を受けた。

地元の小学生への指導など、地域ぐるみで伝統芸能の継承に努めている。

13 県内最大の扇状地

南の石鏡山系と西の高縄山系の間広がる道前平野の上部は、中山川をはじめとする河川によって形成された、典型的な扇状地（関屋川扇状地、古田扇状地等）で、その規模は県内では最大である。少し高台に登れば旧西条市街からも、そのなだらかな傾斜地を目視できる。

この地形が、^{へきがんとうすい}劈巖透水などの近世の新田開発事業を育み、生産量日本一の「愛宕柿」をはじめとした果樹栽培の適地として、旧丹原町の豊かさの源となっている。とても「いいもの」の一つ。



おしぶの森



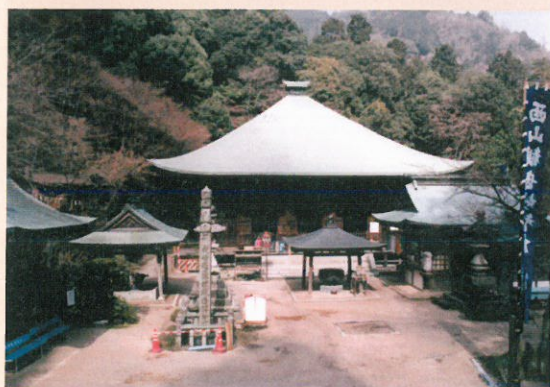
お簾踊り



扇状地で産する愛宕柿



西山興隆寺



興隆寺本堂



興隆寺宝篋印塔

14 西山興隆寺

真言宗醍醐派別格本山興隆寺は、別名を西山寺とも呼ばれ、桓武天皇の勅願寺となって以来、1,350年の歴史と伝統を有する、東予地方随一の霊地として信仰を集めてきた名刹。

四季折々に味わい深い風情があり、多くの重要文化財を有し、年間を通じて参拝者が絶えない。特に、本堂、宝篋印塔、銅鐘は国指定文化財。また、通称“紅葉寺”といわれるように、紅葉の頃は市内外から多くの観光客を集める。

15 興隆寺本堂

現存の本堂は、文中4年（1375年）に再興されたもので、桁行5間、梁間6間の寄棟造で、元来は茅葺であったが、昭和12年の修理の際に、銅板葺に改められたものである。

建築様式は和様に唐様の手法を取り入れたもので、室町時代の様式を良く伝えている。厨子は唐様の一間厨子でしころ造、榎葺（厚さ9mm～3cm、幅9cm～15cm、長さ63cm以下の板で葺く）になっている。

巻斗には、文中3年（1374年）2月の墨書がある。

棟札は2枚あり、一つは文中4年（1375年）に再建されたことが書かれ、もう一つは寛文10年（1670年）に修理されたことが記されている。厨子、巻斗、棟札とあわせて、国指定文化財。

16 興隆寺宝篋印塔（ほうきょういんとう）

本堂右後方に建立されているこの塔は、寺伝によれば、源頼朝の供養塔という。二段の基壇上に立ち、総高305cmの花崗岩製。保存の状態がよく、基礎から相輪まで損傷の跡がなく、整った姿を保っている。

塔身正面に梵字が刻まれ、基礎正面の時代を表す格狭間の中央に蓮弁が浮き彫りされているのは珍しい。

塔の沿革についての確かな伝承はないが、全体の形式、技法から、南北朝時代のもといわれている。台石に嘉暦元年（1326年）の刻名がみえる。国指定文化財。

17 興隆寺銅鐘

県内に3つある、国指定文化財の銅鐘のうちの一つ（他は、出石寺と石手寺にある）。総高112.1cm、口径68.2cmの鑄銅製。

銘文が池の間に陰刻されている。「伊予国道前分桑村郡 古田郷西山興隆寺鐘也 右所奉勸進十方諸人鑄如件 弘安九年丙戌（1286年）5月□日 勸進金剛仏子永賢 大工河内助安」姿形が美しく、銘文の陰刻技法も優れていて、鎌倉時代の代表的梵鐘の一つといわれる。石手寺の銅鐘の銘文には、建長3年（1251年）興隆寺のために作られたものであることが刻まれており、なんらか事情で、その鐘が興隆寺から石手寺に移されたとみられる。建長の鐘が移動して35年後の、弘安9年（1286年）に新しく作られたのが現在の興隆寺の鐘である。

18 大庄屋芥川家墓所と馬塚

興隆寺の駐車場前に大庄屋芥川家の墓所がある。芥川家は文化2年（1805年）から明治維新による庄屋制廃止までの167年間、7代にわたって古田庄屋を務めた（桑村郡大庄屋も兼務）。その間、少年教育のための塾の創設や、古田大火、地震や洪水からの復旧事業、西山川の改修など地域の発展に尽力した。特に4代の源吾（為宣）は、集落内に3本の道路と水路を通し、防火用水を置くなど防災に配慮した区画整理事業を行った。芥川家は関西に移住したが、地元住民により追善供養が今も続いている。また、墓所前にある馬塚は拝領馬の墓で、よく見れば馬の名前が読み取れる。洪水で池の中に埋まっていたものを、住民が掘り出して、現在地へ移転したものである。

19 古田のシダレザクラ

丹原町古田、西山の入口、桑村家先祖代々の墓地の脇にある。樹高8.2m、樹齢約80年は、旧丹原町では一番の巨木。他の桜より開花が1週間ほど早く、可愛いピンク色の小さな花を咲かせる。その樹形はまるで美しい乙女が日傘をさしたようで、高貴さを感じさせる。

20 金仙寺（こんぜんじ）風景

西山興隆寺の北東約1kmのところ、星野山知足院金仙寺がある。寺伝によれば、延暦年間（782年～805年）、報恩大師の四国巡錫の折、「東方より明星飛来し墜落したるにより、草庵結んで一字を建立し、薬師如来安置し、山号を星野と号し、寺を金仙と称した」とある。

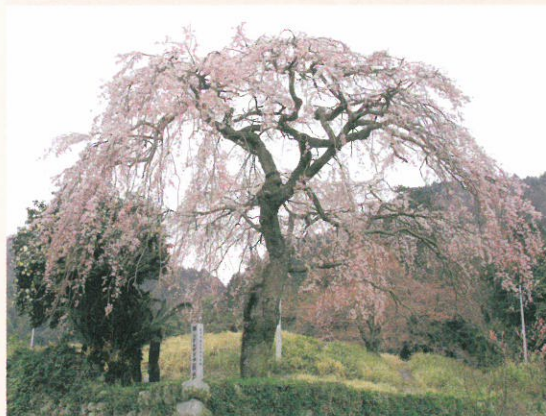
本堂をはじめ貴重な文化財も多いが、寺から一望できる、四季折々の道前平野や燧灘はまさに絶景といえる。

近年、裏庭に石路が群生し、晩秋の頃に黄金色の花をつけ、茶会や句会などに鑑賞されている。

21 常石山城跡と得能（とくのう）氏

徳能集落の北西方常石山上にあった中世の城で、河野氏の流れをひく得能氏の居城であった。「伊予国桑村郡得能村地誌」には「東西24間南北16間、山の絶頂にあり…」とある。南北朝時代に、南朝方の忠臣として、新田義貞に従い、得能通綱が土居通増（久米郡石井郷土居）らとともに各地に転戦したが、延元2年（1337年）、越前金ヶ崎の戦いで一族と自刃して果てた。

昭和3年、昭和天皇御大典記念事業として、常石山山頂に通綱の忠魂碑が建立された。碑表の揮毫は陸軍大将・秋山好古によるものである。また、徳田小学校校庭の西端には、得能、土居両氏の供養塔も建っている。



古田のシダレザクラ



金仙寺



徳能氏・土居氏供養塔



報恩寺

22 報恩寺と河野通生の墓

報恩寺は、丹原町高知にある臨済宗東福寺派の寺院で、本尊は阿弥陀如来。

文明11年（1479年）、河野家53代通久の二男・通生が田畑山林を寄進し、菩提寺として創建したという。その寄進状が寺に保存されている。通生は在京が多かった兄・教通を助け、伊予での河野家の地位をよく守った、軍略智勇の将と伝えられている。文明12年（1480年）に没し、その墓といわれる石造層塔が境内の「寺山」の中腹にある。法名は「報恩寺殿貞巖道居士」。境内には、天正の陣で没したといわれる、西条横山城主近藤長門守重久の墓もあり、のんびり散策することのできるウォーキングロードでもある。

23 高知八幡神社とツツジ群

高知八幡神社は、郷の氏神として長い歴史を持つ古社であり、古くは井河八幡と称していた。「三代実録」に「元慶8年（884年）伊予国井河神従五位下を授く」とある。

慶長8年（1603年）加藤嘉明が武運を祈って、宝剣・神供田を寄進した記録や、代々の松山藩主の尊崇が厚く、度々、祈雨祈晴五穀成就の祈願があったことなどが知られている。

また、神社の長い石段を登りつめた所、拝殿に沿った南側の東隅から社殿の裏手に通ずる道沿いに、ツツジの群落がある。古くから、「躑躅ヶ岡」として知られていた。老木古樹の一部は伐採されたが、近年、周辺の桧や杉を伐採し、日光が良く当たるようにしたため、樹勢はますます盛んになっている。

24 五社霊神（渡部権太夫祠）

渡部権太夫は徳能村の庄屋で、桑村郡が圧政と凶作に苦しんだとき、幕府の目安箱に訴状を投じた。間もなく松山藩から役人が来て治政は改まったが、権太夫は藩政を誹謗した罪により、貞享3年（1686年）6月、新市（旧東予市）の刑場で処刑された。あらかじめ妻を離別するなど、禍を免れようとしたが、老母と三人の子どもは救うことができず処刑された。郷民は権太夫の義心に感動し、宝暦12年（1762年）、その恩徳と義烈を讃え、永く後世に伝えるため、「五社霊神」という小社を建て、霊を祀ったという。

丹波神社の裏手の小高い場所に、5人のもので伝えられる墓が残る。今も村祭り^{まいた}とあわせて、子どもみこしを繰り出し、五社霊神の祭神の神幸^{みこし}をしている。

25 丹波神社（お丹波さん）

渡部公広を祭神とする小社。

公広は、安芸国川尻の城主で丹波大掾という。戦国時代末期来島通康に身を寄せていたが、通康の死後、来島氏が豊臣方についたため、通康の霊を弔うため霊場巡拝の旅に出て、徳能の地に隠棲した。天正13年（1585年）の秀吉の四国侵攻で犠牲となった人々の霊を弔い、傷ついた人々を救済して善根^{ぜんこん}を施したという。慶長3年（1598年）公広は亡くなるが、死後も公広の生前の徳を慕って、墳墓に参詣する郷人は後を絶たなかったと伝えられる。その地に建てられた社を丹波神社、通称「お丹波さん」といい、今なお、諸病平癒^{へいゆ}の霊験^{れいげん}あらたかで、特に小児の咳の病には効験ありという。



高知八幡神社



五社霊神

26 専念寺のイチヨウ

樹齢約360年（1643年頃に植樹されたという言い伝えあり）の古木。

台風の被害で幹の中ほどから半分に裂け折れたり、戦時中に米軍機の目標にならないようにと切り落とされたりしたこともあるが、今は元のようにそびえたっている。11月中旬頃になると、黄金色に色づき、遠方からでも秋の深まりを実感させてくれる。

27 一字一石塔と烏八臼（うはっきゅう）

兼久大池の北側のみかん畑の東端を少し登った所に、約2mの五輪塔がある。塔の地輪に「一字一石三礼塔」とあり、水輪に「^{すいりん}「鶺鴒」^{たん}」という見慣れない文字が見える。この字は「鳥、八、臼（ウハッキュー）」の合字で、室町時代から江戸時代の関東地区、曹洞宗や浄土宗の墓標に多く見られるもので、愛媛県では非常に数が少ない。この一字で「滅罪成仏の功德、吉祥成就」を表すとも言われている。

一字一石塔は、^{まじら}経塚、一石さんとも言われ、小さな石に經典の文字を一字ずつ書き、それをまとめて埋めた場所に目印として建てる塔のことを言い、「田野村誌」の伝えるところによると、鳥取県の僧・大鎮が、文化元年（1804年）に「妙法蓮華教妙来無量」66部1,895字を写して、三礼しながら埋めたという。その祈祷のおり、大鎮は僧衣を3枚着破したと伝えている。

28 兼久（かねさ）大池

松山藩の代官記録によれば、中山川から北東方向へ、延長2,860m、幅2m、深さ2mの掘割水路を引き込むことで、現在地に約70万㎡の貯水が可能な溜め池を造ったとされている。1年半を要して、寛政3年（1791年）4月に完成した。

ここでも、来見村庄屋越智喜三左衛門が本工事の必要性を強く説いたとされている。約800町歩の水田が潤い、農民の素朴な感謝の思いが、以下の民謡にもうたわれている。元歌「娘おやりの田野丹原へ死ぬる末期の水もない」が「田野は田どころ米どころ嫁にやるなら田野丹原へ」へ変わったのだという。

今の大池は駐車場や遊歩道も整備された親水公園として、市民の憩いの場となっている。春には池の周りの桜も美しい。

29 たんばら園

6haの栽培温室には、オランダで開発された栽培方法を独自に発展させた「アーチング栽培」を取り入れ、赤、白、ピンクなどの色とりどりの11品種のバラが見事な花をつける。

30 綾延神社殿中奴

綾延神社の秋季大祭の時、神輿渡御の先導をするのが、「奴行列」。

綾延神社の奴は、松下流殿中奴で槍は投げない。12人の行列。拝殿からお旅所までは奴が進まないと、神輿も進めないため、何度も逆戻りしたり奴行列をすり抜けようとして阻止されたりするのが宮出しの見もの。祭りにはそれぞれの地域の歴史が刻まれていて楽しい。



専念寺のイチヨウ



一字一石塔



綾延神社殿中奴



土居のクスノキ

31 土居のクスノキ

土居地区北方の田の中にある。根回り14.3m、目通り11.4m、地上1mほどのところから分枝して4本となり、高さは27mにも及び、樹齢は1,000年以上と伝えられる。

根元に、不浄を清浄にするといわれる「鳥うす枢しま洪みょう明おう王」を祀る子社がある。

32 西条市丹原文化会館

平成5年、ふるさと創生事業で建設された「丹原町文化会館」は、町のシンボルとして、長く丹原の文化や芸術の育成を担ってきた。その規模や設備の面では「西条総合文化会館」には及ばないが、総合文化会館にはない豊かな自然に抱かれた立地条件を有しており、新しい地域文化の創生や情報発信の拠点として、これからも発展を続けていく。

また、大ホールの緞帳の絵は黒光茂明氏（田滝地区出身の画家、黒光茂樹氏のご子息）の作品、小ホールの緞帳は古出新田出身の武田耕雪氏の作品である。



丹原文化会館

33 紅梅鹿毛(こばかげ)の墓(馬塚)

丹原文化会館のすぐ南、田野地区北田野の国広館跡にあり、通称「お馬塚」と呼ばれている。源平合戦・宇治川の先陣争いで有名な「磨墨すずすみ」の母馬、紅梅鹿毛こばかげの墓であるという。

その墓のそばに、国広地区発祥の記念木と伝えられる「クスノキ」の大木がある。

34 戸嶋号の墓(馬塚)

田野保育所の近辺にある。庄屋・野口九郎右衛門が将軍家より拝領した「戸嶋号」の墓で、やや丸みを帯びた自然石の墓の表面に「従將軍家、御拝領馬」と二行に記し、その下に「戸嶋塚」、右に「安永五申年」（1776年）、左に「二月廿六日」、また頭部に「預主 野口九郎右衛門」の銘が刻まれている。

35 釜之口堰

釜之口は水田千町歩を灌漑する水口みなくちのことで、田野・丹原・周布地区の水田千町歩の用水を賄ってきた。和名抄に「田野郷」の名をとどめているところからみても、1,500~1,600年前に既にこの釜之口井堰は存在していたと推測される。

時代は遡り、藩政時代は松山藩の穀倉であった周布地区を守る重要な井堰であったと伝えられるが、分水に関して紛争が絶えず、また中山川と関屋川との合流点に設けられていたため、流出土砂の堆積や天災などで使用不能となることも多く、その復旧に悩まされたとも伝えられている。

こんぴら大門から22里の石柱がある。



紅梅鹿毛の墓